

男性同性愛者のことばづかい —一般の男性、及び女性との比較—

Ruth Vanbaelen

キーワード:調査分析、ことばづかいに対する意識、男女差、男性同性愛者

0. はじめに

日本語に男女差があることは広く認められている。その差は生物学的なものではなく社会的影響によって生じるものだと考えられる。例えば、井出(1983)では、男女のことばづかいにおける丁寧度の差に注目し、女性がより丁寧に話している理由として男女に対する社会の側からの期待、及び経済力の差という2つが挙げられている。この考え方は、男女差を社会構造の反映とみるものといえるだろう。つまり、大まかにいえば、男性が社会的に上位な立場で、女性はそれより低い立場に立たされている。そうした社会的立場によりことばづかいの丁寧度が変わるという考え方である。換言してみれば、社会で果たす役割がその人のことばづかいを作り上げているのである。

しかし現在、社会的な役割分担は従来ほど明確なものではなくなってきた。これまでの社会状況がことばづかいに影響を与えていることは無視できないが、例えば若い男性と女性のことばづかいにおける差が縮まっていることも観察できる。さらに社会的地位の高い女性もあり、彼女達のことばづかいにも変化が現れていると考えられる(川口(1987)を参照)。したがって、男性、及び女性という両性を二項対立的に捉え、それぞれのいわゆる生物学的なジェンダーのことばを調査してきた研究と異なり、ジェンダーが2つに限定されおらず、社会において果たす役割によって生じるものとすれば、ことばづかいもジェンダーと結びつき、変化するものだと考えられるのではないか。本稿ではこのような考えに基づいて、男性同性愛者(注1)のことばづかいを一般の男性(注2)、及び女性と比較する。

まずこれまで研究されてきた一般の男性、及び女性のことばづかいにも言及した上で、男性同性愛者のことばづかいがどのようなものであるかについて記述する。そして次に、

ことばづかいにおける差が生じる理由について考察を試みる。

1. 調査方法

1996年6月から12月にかけて東京で行った質問紙調査によって得られたデータを使用する。人数は女性31名、一般の男性40名、男性同性愛者27名、計98名である。年齢

が20代から30代までの学生および社会人を対象とした。女性、及び男性同性愛者の6割前後、そして一般の男性の3.5割は東京周辺出身である。さらに、その他の地方の被験者の方言は回答にほとんど影響を及ぼさなかったのであるため、以下に出身について触れない。

質問紙調査は3つに分類できる。第1に例文を出し、それは男性的な発話なのか、女性的な発話なのかを判断してもらった。第2に被験者自身のことばづかいとその意識についていくつかの質問を出した。そして最後に例文を出し、被験者がそのことばを使うか否か回答してもらった。第1と2を通してそれぞれのグループが一般的に日本語をどのように意識しているかということ、及びグループ間のその意識の差が明らかになる。第3の部分では、グループ間で具体的なことばづかいの差がどこに生じるかを調べる。

日本語の男女差を扱う先行研究（Shibamoto(1987)、本田(1995)など）を検討した結果、もっとも男女差が現れると思われる項目は美化語・人称代名詞（1人称、2人称）・断定を避ける表現・終助詞・及び縮約形の5つであり、調査の項目として扱うことにした。

2. データの分析

2.1. 具体的な発話に対する意識

ここでは被験者が、発話の特定されていない発話を男女差の面でどのように把握するのか調べるのである。なぜなら、同じ発話のことでありながら、グループ間に判断の際立った差が現れた場合、その原因を調べる必要があるからである。

上述した項目を含む例文を出し、挙げられた例文が男性的・女性的であるかどうかを4段階（非常に男性的／やや男性的／やや女性的／非常に女性的）で判断してもらった。それぞれのグループの間にはほとんど差が現れなかった。調べた項目を下線した例文、及び結果を表1に示した。

具体的な発話に対する意識に関しては、グループ間にほとんど差が現れていないため、被験者もある程度それに従って話すと思われる。しかし、男性同性愛者のことばづかいが実際には一般の男性と異なっていたら、それは男性同性愛者が自分自身を一般の男性と区別して回答したからだと考えられる。そうであるとすれば、その理由は何かを調べる必要がある。その考察に入る前に、まず被験者が自分のことばをどのように意識しているか、そして被験者自身の具体的なことばづかいについて記述する。

	非常に男性的	やや男性的	やや女性的	非常に女性的
美化語	めしはどうする？	最近仕事は忙しいですか？	ごはんはどうする？ 最近お仕事は忙しいですか？	
1人称 代名詞: 2人称	おれ、映画が好き ぼく、映画が好き。	これがきみの？	これがあんたの？	あたし、映画が好き。 わたし、映画が好き。 これがあなたの？
断定を避ける 表現		病院で見てもらった方がいい。	病院で見てもらった方がいいんじゃない？	
終助詞	あした学校に行かないぞ。	安いよ。 ～さんがパーティーに行くかな？	あの映画、面白かったよね。 ～さんがパーティーに行くかな？	あ、いいわよ。 ～さんがパーティーに行くかしら？
縮約形		忘れてしまった急がなければならぬ。	忘れちゃった。急がなきゃ。	

表 1: 男性的・女性的と思われる発話

2.2. 被験者自身のことばづかいに対する意識

ことばづかいが男らしいか女らしいか、3つの質問を通して、被験者は自分自身のことばづかいをどのように意識しているかを調べ、回答の理由を自由に述べてもらった。なお、ここでは男性同性愛者は便宜的に自分が「男性」であることを前提としたうえで自分が男らしい・女らしいことばを使用するかという問いに答えてもらった。なぜなら、ジェンダーに関する問いでは、男性同性愛者の全てが自分が男性であると明言しているわけではないからである。

2. 2. 1. 問い1：自分が使用する日本語が、男性の場合、男らしいと思っているか、女性の場合、女らしいと思っているか。またその理由について述べて下さい。

この問いでは、グループ間に差が現れた。女性の場合には、回答はほとんど半々に分かれ、自分の日本語を女らしいと評価する人は 45.16 %、女らしくないと評価する人は 41.94 %である。一般の男性のグループでは、自分のことばを男らしいと考える人が 65 %、そう考えない人が 27.50 %である。男性同性愛者ではわずか 7.41 %が自分のことばを男らしいと評価し、男らしくないと考える人は 66.67 %となっており、一般の男性のグループと比較して大きく異なった結果を示している。挙げられている理由は以下のようにまとめられる。

- ① A. 自分のことばづかいが女らしいと回答している女性は、おもに次の理由を述べている。

1. 女性特有のことばを使う

- a. 終助詞：～かしら／～わ／～なのよね／～なの？／～のよ
- b. 接頭辞：お～／ご～
- c. 人称代名詞：わたし／あたし

2. 丁寧なことばを使用する

3. 乱暴なことばを使用しない

- ① B. 自分のことばづかいが女らしくないと回答している女性は、主に以下の理由を挙げている。

1. 日本語には男女差はほとんどない。

2. 女性特有の終助詞（① A. の 1.a. を参考）を使用しない

3. 男性がよく使用することばを使う（美化語を使用しない／命令調）

- ② A. 自分のことば遣いが男らしいと答えている一般の男性が挙げる理由は以下の通りである。

1. 男性特有のことばづかいをする

- a. 語尾に終助詞の「～ぜ／～ぞ」などつける
- b. 人称代名詞：おれ／ぼく
- c. 命令調

2. 丁寧でない、乱暴なことばづかいをする

- ② B. 自分のことばが男らしくないと答えている一般の男性は、おもに2つの理由を述べ

ている。

1.自分のことばはどちらとも言えず、中性的である

2.男性特有のことば(② A.の 1.a～cを参考)を使用しない。

③男性同性愛者の中で、自分のことばを男らしいと評価したのは27人中わずか2人であった。自分のことばを男らしいと評価しない人が圧倒的に多く、挙げられた理由は次の通りである。

1.ことばを使い分けている(仕事関係・友人関係)

2.男性特有のことば(② A.の 1.a～cを参考)を使用しない

3.乱暴で、丁寧でないことばを避ける

それぞれのグループで挙げられた理由を考察すると、ここでも3つのグループでは女性・男性のことばづかいの特徴についての意見がほぼ一致しているといえる。つまり、丁寧なことばづかいは男らしくないと判断され、また、女性が女らしくないことばの特徴であると回答した命令調は一般の男性、及び男性同性愛者には男らしいことばの特徴として挙げられている。

2. 2.2. 問い2：男性の場合、自分のことばづかいが男らしい、女性の場合、女らしい

といわれたことがあるか。またそういわれた理由について述べて下さい。

被験者が自分のことばづかいに対する周囲の人々の判断をどのように認識しているかについて調べるために、第2の問いとして、男性の場合、自分のことばが男らしい、女性の場合、女らしいといわれたことがあるか尋ねた。そのようにいわれたことがあると回答した人は、3つのグループともに少ない。女性が22.58%で一番多く、その理由として丁寧に話す、または女性特有のことばをよく使用していることが挙げられている。次は一般の男性で(17.50%)、乱暴に話しているからだという理由が挙げられている。一方、男性同性愛者のグループでは、3人のみが男らしいことばづかいをしていると言われたが、3人もその時は故意に男らしいことばを使用していたからであるということを経験として挙げている。要するに、女性、または一般の男性は普段のことばづかいで判断されていたのに対して、男性同性愛者の3人はそういわれたときにたまたま男らしいことばづかいをしていたのであり、普段はそれほど男らしく聞こえることばを使用していないと解釈できる。

2. 2. 3. 問い3: 男性の場合、自分のことばづかいが女らしい、女性の場合、男らしいと

いわれたことがあるか。またそういわれた理由について述べて下さい。

最後に、異性の特徴を持つようなことばづかいをしているといわれたことがあるか尋ねた。このような経験は、一般の男性がもっとも少なく（10 %）、次に女性（35.48 %）、そして男性同性愛者がもっとも多い（62.96 %）ということが分かった。一般の男性が挙げた理由は、女性特有と思われることばを使用していた、または丁寧に話していたということである。女性はおもに男性特有と思われることばを使用していたということを理由として挙げている。男性同性愛者は一般の男性が挙げた理由以外にも、男らしさを強調することばを使用しないということを理由として挙げている。

以上の3つの問いから、まず、被験者が男性のことばづかい、及び女性のことばづかいをどのような特徴を持つものとして捉えているのかということがある程度明らかになった。そして、男性同性愛者は自分のことばづかいが男らしいとはあまり思っていないうえ、他人からも同様の評価を頻繁に受けていることが分かった。さらに、男性同性愛者の中には、故意に男らしく聞こえるように話す人もいるようである。それは、ことばづかいが男らしくないと評価されるのを避けるためであるとも考えられる。

2. 3. 被験者自身が使用することばづかい

さまざまな場面を設定し、それぞれの項目を含む例文を出し、被験者がそうした表現を使うか否かを調べた。設定した場面、および相手の丁寧度や親疎の度合を考慮にいれ、できるだけふさわしいことばづかいの例文を作った。紙幅の関係でもっとも差が現れた美化語、1人称代名詞及び断定を避ける表現という3つの項目のみ扱う。

2. 3. 1. 美化語

被験者が接頭辞の「お」や美化語を使うか否かを調べた。場面としては、家族と一緒にいることを設定した。家族の場合、「親疎」の「親」の度合が高く、丁寧度が低くなるため、美化語の使用も少ないと考えられる。したがって、美化語をもっとも使うグループがより丁寧であるといえる。（表2を参照）

女性は5組のうち、4組については、ほぼ100%に近い使用率で、美化語の選択をした。しかし、家族と話している際には、「仕事」に「お」をつけない場合が多い。一般の男性

のグループでは、「めし」と「金」の場合に回答がほぼ半々に分かれている。家族の人に対して、「箸」、「仕事」、「腹」の場合には美化語を使わないのが普通のようなのである。男性同性愛者の結果は、「箸」の使用以外では、女性の結果に近いものである。したがって、男性同性愛者は一般の男性より美化語を多く使い、より丁寧な表現を使うといえる。

しかし注意すべき点は、語彙によって美化語の使用率の差がみられることである。この5組を調べた結果、女性と男性同性愛者は一般の男性より美化語を多く使い、ことばづかいが丁寧であるといえるが、一般化するには、さらに多くの語彙、及び異なる場面での使用を調べる必要があると考えられる。

	めし	ごはん	その他	かね	お金	その他	箸	お箸	その他	仕事	お仕事	その他	腹が いっぱい	おなか が いっぱい	その他
女	0	31 (100%)	0	0	31 (100%)	0	5 (16%)	26 (83%)	0	30 (96%)	1 (3%)	0	0	28 (90%)	3 (9%)
男	19 (47%)	19 (47%)	2 (5%)	19 (47%)	21 (52%)	0	32 (80%)	8 (20%)	0	40 (100%)	0	0	27 (67%)	10 (25%)	3 (7%)
ゲイ	1 (3%)	25 (92%)	1 (3%)	4 (14%)	23 (85%)	0	21 (77%)	6 (22%)	0	26 (96%)	1 (3%)	0	10 (37%)	15 (55%)	2 (7%)

表2:美化語

2. 3. 2. 1 人称代名詞

この問いでは6種類の相手を設定し、それぞれ自分のことをさしている場合に、どうい
う人称代名詞を使うかということ調べた。(表3 a・b・cを参照)

女性の場合には、どんな相手に対しても、自分をさしているときには、「わたし」とい
う自称代名詞が一番多く使用されていることが分かる。同性、または異性の目上の人に対
しては、96.77%が「わたし」を使用する。そして、同性の友人に対して(77.42%)、ま
たは異性の目下の人に対して(80.65%)は、ほぼ同じ割合で「わたし」が使用されてい
る。異性の友人と同性の目下の人に対しては「わたし」の使用率が一番低く、74.19%に
とどまっている。

「わたし」以外で女性に使用される1人称代名詞は「あたし」である。しかし、「あた
し」は特に自分と同じ立場か、自分より目下である人に対して使う自称代名詞である(19.
35%~25.81%)。自分より目上の人に対して、「あたし」を使うことは非常に少ない(3.2
3%)。

女性には「わたし」と「あたし」以外の1人称代名詞は、ほとんど使用されていない。
被験者の1人は同性、または異性の友人に自分のことを語る場合、直接自分の名を使用す

	同性の友人						異性の友人					
	わたし	あたし	ぼく	おれ	その他	無回答	わたし	あたし	ぼく	おれ	その他	無回答
女 (31名)	24 (77)	6 (19)	0	0	1 (3)	0	23 (74)	7 (22)	0	0	1 (3)	0
男 (40名)	0	0	8 (20)	31 (77)	1 (2.5)	0	0	0	13 (32)	26 (65)	1 (2.5)	0
ゲイ (27名)	2 (7.4)	2 (7.4)	14 (51)	7 (25)	1 (3.7)	1 (3.7)	2 (7.4)	1 (3.7)	16 (59)	6 (22)	1 (3.7)	1 (3.7)

表3. a: 1人称代名詞 (友人の場合) (カッコ内はパーセンテージ)

	同性の目上の人						異性の目上の人					
	わたし	あたし	ぼく	おれ	その他	無回答	わたし	あたし	ぼく	おれ	その他	無回答
女 (31名)	30 (96)	1 (3.2)	0	0	0	0	30 (96)	1 (3.2)	0	0	0	0
男 (40名)	15 (37)	0	21 (52)	1 (2.5)	3 (7.5)	0	14 (35)	0	20 (50)	3 (7.5)	3 (7.5)	0
ゲイ (27名)	9 (33)	2 (7.4)	14 (51)	0	1 (3.7)	1 (3.7)	9 (33)	1 (3.7)	15 (55)	0	1 (3.7)	1 (3.7)

表3. b: 1人称代名詞 (目上の人の場合) (カッコ内はパーセンテージ)

	同性の目下の人						異性の目下の人					
	わたし	あたし	ぼく	おれ	その他	無回答	わたし	あたし	ぼく	おれ	その他	無回答
女 (31名)	23 (74)	8 (25)	0	0	0	0	25 (80)	6 (19)	0	0	0	0
男 (40名)	2 (5)	0	6 (15)	29 (72)	3 (7.5)	0	2 (5)	0	8 (20)	27 (67)	3 (7.5)	0
ゲイ (27名)	1 (3.7)	2 (7.4)	15 (55)	7 (25)	1 (3.7)	1 (3.7)	1 (3.7)	1 (3.7)	18 (66)	5 (18)	1 (3.7)	1 (3.7)

表3. c: 1人称代名詞 (目下の人の場合) (カッコ内はパーセンテージ)

ると回答したが、このような使用は年齢が上がると同時に減少すると考えられる。

一方、一般の男性の結果を見ると、まず人称代名詞のバリエーションが多いことが分かる。「わたし」、「ぼく」、「おれ」、「その他（例えば「自分」）」は、それぞれの使用率が相互に幅広く異なっているが、すべてが使用される。以下に「おれ」と「ぼく」の使用について詳述する。

一般の男性は、自分のことをさしている場合に同性、または異性の友人、そして同性、または異性の目下の人に対して「おれ」をもっとも多く使う。その中で「おれ」は同性の友人に対して一番多く使われ（77.50 %）、そして同性の目下の人（72.50 %）、異性の目下の人（67.50 %）と異性の友人に対して（65 %）の順番で、「おれ」の使用率が減少する。

この四人の相手に対して、二番目に多く選択された1人称代名詞は「ぼく」である。異性の友人（32.50 %）、異性の目下の人（20 %）、同性の友人（20 %）と同性の目下の人（15 %）の順で「ぼく」の使用率が減少する。

同性、または異性の目上の人に対しては「おれ」の使用が非常に少なく（3.48 %以下）なり、「ぼく」が一番多く使われている（同性の目上の人52.50 %、異性の目上の人50 %）。その次に多く使用されるのは「わたし」という一人称代名詞である（37.50 % / 35 %）。この場合、相手が話し手より目上であるため、より丁寧である「ぼく」、ともっとも丁寧である「わたし」が選択されると推察できる。この場合では、相手の性は選択にほとんど影響を及ぼさない。

「おれ」と「ぼく」以外の1人称代名詞、つまり「わたし」、「その他」はそれぞれ3人以下の被験者によって選択されているだけであって、一般的には使用率は低いといえるだろう。

「おれ」をもっとも丁寧度の低い一人称代名詞として考えてみると、次のような考察ができる。一般の男性にとって一番親しく、気を使わずに話ができる相手は同性の友人、または同性の目下の人である。そのため、丁寧度の低い「おれ」が一番多く使われていると考えられる。これらの相手に対しては丁寧度がやや高いと考えられる「ぼく」の使用率は低いことが分かる。そして相手が女性の場合、「おれ」の使用率は「ぼく」の使用率より高いが、「おれ」の使用率が減るにつれて、「ぼく」の使用率が増加することが分かる。つまり、「おれ」と「ぼく」の使用率が聞き手の性によって影響されていることを示している。換言すれば、相手が男性であれば「おれ」の使用率が増加し、「ぼく」の使用率が相対的に減少し、相手が女性であれば「おれ」の使用率が減少し、相対的に「ぼく」の使

用率が増加するということである。

一般の男性が自分をさしている場合には相手の性、または相手の立場によって1人称代名詞の選択に変化が現れるといえる。

最後に男性同性愛者の結果を考察する。男性同性愛者の1人称代名詞の使用は一般の男性の使用と異なっていることが分かった。彼らは、どの相手に対しても「ぼく」をもっとも多く使用する。異性の人に対しては、「ぼく」の使用率が一番高く（異性の目下 66.67 %、異性の友人 56.26 %、異性の目上 55.56 %）、同性の人に対しては「ぼく」の使用がわずかに減少し（同性の目下 55.56 %、同性の友人や同性の目上 51.85 %）、「おれ」の使用が多少増える。一般の男性の場合は同性・異性の友人や目下の人に対する「おれ」の使用率が高かったが、男性同性愛者の「おれ」の使用率は2割前後にとどまっている。

目上の人に対しては、男性同性愛者は一般の男性と同じ傾向を示し、「私」の使用率が他の相手と比べて増加している。さらに、一般の男性と違って、どの相手に対しても、「わたし」や「あたし」が多少使用されている。

要するに、男性同性愛者は一般の男性より丁寧度のやや高い1人称代名詞をより多く使い、またそのバリエーションは多いといえる。

2. 3. 3. 断定を避ける表現

ここで設定したのは、具合の悪い友人に、病院に行くように勧めるという場面である。選択としては「病院に行った方がいいんじゃないですか」、のような断定を避ける言い方、または「病院に行きなさい」のような断定を避けていない言い方を含む表現を出した。さらに自由回答では被験者は主に次のような断定を避ける表現を挙げている。（自由回答では断定を避けていない直接的な言い方は少なかった。）

- a.病院に行った方がいいんじゃないかな？（女性2人）
- b.病院に行った方がいいんじゃない？（女性8人／男性同性愛者6人）
- c.病院に行った方がいいと思うよ（男性同性愛者1人）
- d.病院へ行ったら？（女性1人）

一般の男性の6割、そして女性の61.29%は断定を避ける表現を選択した。男性同性愛者は断定を避ける表現の最も高い使用率を示している（77.77%）。男性同性愛者の方が婉曲的で、表1でやや女性的と判断された断定を避ける表現を、女性より多く用いるといえる。婉曲的な表現が直接的な言い方より丁寧だとすれば、男性同性愛者は一般の男性、及

び女性よりも丁寧なことばづかいをしているといえる。

2.4. データ分析のまとめ

女らしい、あるいは男らしいことばの特徴がどのようなものであるかに関しては、それぞれのグループの意見はほぼ一致している。しかし、被験者自身が使用する具体的なことばづかいには差が現れた。今回の調査結果を男性同性愛者を中心にまとめてみると以下の通りである。

①男性同性愛者は一般の男性より美化語を多く使い、女性と似たような使用率を示している。

②男性同性愛者はどんな相手に対しても1人称代名詞として「ぼく」をもっとも多く使用する。一方、一般の男性は「おれ」を多く使用する。しかし、目上の人に対しては、男性同性愛者、及び一般の男性はほぼ同じ傾向を示している。(「わたし」の使用率は3割で、「ぼく」の使用率は5割である。) 女性は主に「わたし」を用いる。

③断定を避ける表現の場合では、男性同性愛者の使用率は最も高い。少なくともこれらの3項目の場合、男性同性愛者は一般の男性より丁寧なことばづかいをしているといえる。そこで以下、男性同性愛者がなぜ一般の男性と異なる話し方をするかについて考察する。

3. 男性同性愛者、及び一般の男性のことばづかいにおける差

2つの説明が考えられる。第1には、日本語の場合、男性より女性のほうが丁寧なことばづかいをしている(井出(1983)、井出・川成(1984)を参照)。英語における男女の丁寧度の差を調べた Trudgill(1975、1983)はその現象を次のように説明している。女性の社会的立場は男性より不安定である場合が多い(低い収入など)。したがって、社会的身分を明示するため、あるいはその身分を安定させるため社会的威信を持つことばを使用する。社会的威信を持つことばは、主に丁寧なことばである。そして、多くの社会では男性は行動(つまり、仕事など)により判断、評価されるのに対して、女性は外観で判断される場合が多い。したがって、よりよい外観を作るため丁寧なことばで話す。さらに、社会による期待も挙げられる。女性は上品であるべきだという理念が強いため、女性は親や社会的規範などによってそれに従うように教育される。その結果、女性の方が威信と身分を自覚し、丁

寧なことばづかいをするというのである。

男性同性愛者は生物学的には男性であるため、一般の男性と同様に仕事などで判断され、社会的な立場は比較的安定していると考えられる。しかし、性的オリエンテーションは社会の期待と違っているため、男性同性愛者であることが発覚すると、非難される場合が多く、立場が不安定になるといえる。発覚しなくても、そうなることに対する恐怖心から、自分の立場が不安定であると感じていると思われる。社会的に不安定な立場にいるといわれる女性でも、ジェンダーとしての役割はある程度明確である。しかし、男性同性愛者は当該社会の中で1つのジェンダーとしての役割すら与えられていない。このことを考慮すると、「社会的立場の不安定さ」に関しては両者の置かれている状況は多少異なっているが、心理的に抑圧されているという面ではある程度の共通性がみられるのではないだろうか。したがって、こうした立場を安定させるための1つの方法としては、ことばづかいを適応させることが考えられる。そのため、Trudgillの説明のように、丁寧なことばづかいを使用するようになるということが考えられる。

そして第2の説明は次の通りである。ことばに対する意識の問いから、被験者にとって男らしいことばは丁寧でない、乱暴であることが明らかになった。さらに「ぜ・ぞ」のような終助詞や命令調なども男らしいことばの特徴であると判断された。男性同性愛者は自分を男性として強調する必要を感じていないと考えられる。しかしながらこれは推測に過ぎず、もっと男性同性愛者の心理的側面も調査する必要があるが、少なくとも彼らの「男性」という概念の定義は一般の社会による「男性」の定義と異なるに違いない。そうであるが故に、彼らが上述した男性のことばづかいの特徴を避け、代わりに女性のことばづかいに傾くのだと考えられる。女性のことばづかいがより丁寧であるため、彼らのことばづかいも次第に丁寧なものとなるのだ。さらに別の観点から見ると、次のように考えられる。これまでのことばにおける男女差の研究では、男性のことばづかいが基準として扱われてきた。それを基準とすれば、女性はより丁寧¹に話している。しかし、女性のことばづかい、つまり丁寧な話し方を基準とすれば、自分を完全に男性と同一視できない男性同性愛者が丁寧²に話すことも当然であるのかもしれない。

4. 今後の課題

質問紙調査はあくまでも意識調査であるため、今後はアンケートによるデータに限らず、

男性同性愛者の実際のことばづかひの分析も行わなければならない。録音したデータを分析する際、聞き手の性的オリエンテーション、または場面の改まり度などを考慮に入れて、男性同性愛者である話し手のことばづかひがどのように変化するかということも調べる必要がある。

そして、音声的な面、または非言語行動をもデータに含めて研究を進めていきたい。

注

注1：「男性同性愛者」は広い概念である。通常「おかま」と呼ばれている服装倒錯者と、「ニュー・ハーフ」と呼ばれる性転換者／性倒錯者という2つのタイプは自分を女性として強調しようとし、そのことを商売にしている者が多い。そのため、彼らが日常生活で使用している「純粹」なことばづかひを捉えるのは困難であることが予想されたため、対象として除外した。本稿で対象にしたタイプは「ゲイ」と呼ばれる男色を好む男性である。それを確認するため補助的に質問紙調査を行った。その内容は自分のことを男性同性愛者としてどのように定義しているかということである。この調査で自分を「ゲイ」以外として定義した被験者は、データから除外した。

注2：本論文では「男性同性愛者」という用語を「一般の男性」とは区別された語として使う。しかし、男性同性愛者が「普通」ではないという意味は含有されていないことに留意されたい。これまでのことばにおける男女差の研究では、女性と男性という2つのグループのみが扱われてきた。そのような研究の「男性」というグループに男性同性愛者も含まれていたことは十分に推測できるが、別々に扱ってこなかったため、そのグループの結果が「一般の男性」のことばづかひとして考えられてきたといえる。それと同様に、筆者が調査を行った「一般の男性」のグループの中にも、男性同性愛者がいる可能性は否定できない。

参考文献

井出祥子 1983 「女らしさの言語学 ―なぜ女は女性語を使うのか―」

『講座日本語の表現3 話しことばの表現』水谷修編 筑摩書房

井出祥子、川成美香 1984 「日本の女性語・世界の女性語」『言語生活』387

川口容子 1987 「まじり合う男女のことば ―実態調査による現状』『言語生活』429

- 本田明子 1995 「日本語における女性の話しことばに関する意識」
『筑波応用言語学研究』2
- Chambers, J.K. 1995 Sociolinguistic Theory Oxford Blackwell
- Shibamoto, J.S. 1987 The Womanly Woman: Manipulation of stereotypical and Non- stereotypical
Features of Japanese Female Speech
in: Language, Gender and Sex in Comparative Perspective
Philips, S.U. & Steele, S. & Tanz, C. ed.
Cambridge Cambridge University Press
- Trudgill, P. 1975 Urban British English of Norwich
in: Language and Sex: Difference and Dominance
Thorne, B. & Henley, N. ed.
Massachusetts Newbury House Publishers
(reprinted from: Sex, Covert Prestige and Linguistic Change in
the Urban English of Norwich
in: Language in Society 1 (1972))
- 1983 On Dialect: Social and Geographical Perspectives
Oxford Basil Blackwell